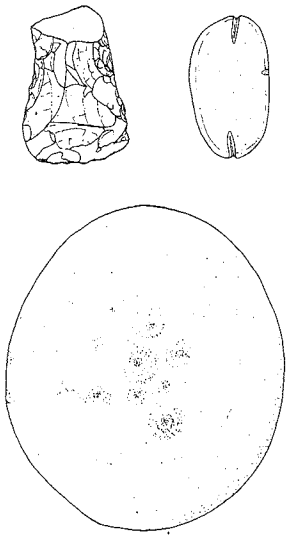
二軒在家二本杉遺跡



1992

松井田町埋蔵文化財調査会

二軒在家二本杉遺跡　正誤表

ページ	行	誤	正
4	14	張出山南端の	張出部南端の
4	30	緩やかた	緩やかな
6	31～32	磨滅面が	磨滅面が
6	35	化に	他に
8	14	(スクリーントー部分)	(スクリーントーン部分)

序　　文

松井田町は、西に長野県との境をなす碓氷峠や入山峠の山並みが続き、東は安中市から高崎市へと延びる平野部の広がる地であります。このような立地から、本町は古くより群馬の西の玄関口として発達してまいりました。急峻な峰々は古代には峠越えの歌として万葉集に詠われ、また幹線である中山道の発達は宿場を中心に東西の交流を招き、このような往時を偲ばせる史跡や町並みが道筋の至るところに残っております。また、近代遺産として注目されます旧碓氷線跡は、交通の歴史を語るうえで欠かせないアプト式鉄道の施設として、現在その整備の一歩を踏み出したところであります。近年における様々の開発事業はまさにこのような歴史文化の延長上に位置するものであり、このことを踏まえ、未来に伝えてゆくことが現代に生きる私達の責務でもあろうかと思います。

このたび、工場建設に先立ち発掘調査を行ないましたところ、縄文時代と平安時代の住居跡および土坑が検出されました。縄文時代の住居跡は柄鏡形敷石住居として特徴的なあり方を示す好資料であり、また平安時代の住居跡も遺存状況が良好なものです。これらは既存の資料と共に地域の歴史を解明するうえで有効に活用され得るものと言えましょう。本報告書がその一助となれば幸いに存じます。

最後に、調査に参加された方々の御苦労と、本書作成にあたって多くの御助言、御協力をいただいた関係各位にお礼を申し述べ、序文と致します。

平成4年4月

松井田町埋蔵文化財調査会

会長　武田　弘

例　　言

1　本書は（株）キャロッセ松井田工場建設に先立ち調査した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遺跡は、群馬県碓氷郡松井田町大字二軒在家字二本杉1,107-1他に所在する。

3　調査は（株）キャロッセの委託を受けて松井田町埋蔵文化財調査会が行なった。

4　調査における全ての費用は（株）キャロッセが負担した。

5　調査期間は、発掘調査　平成３年８月19日～９月20日
　　整理作業　平成３年11月19日～平成４年４月30日である。

6　調査は、事務員　田口　修（松井田町教育委員会社会教育課主事）が担当した。

7　整理作業においては田口とともに大野ひろ子、都丸孝江がこれに従事した。

8　本書の執筆、編集は田口が行なった。

9　遺物の石質については小林二三雄氏に鑑定して頂いた。

10　出土遺物、資料類は当調査会の依頼により松井田町教育委員会が一括して保管している。

11　発掘調査及び整理作業においては以下の方々より御教示、御協力を頂いた。（敬称略）
　上原富次（松井田町文化財調査委員）、佐藤義一（同）、千田幸生（山武考古学研究所）、長井正欣（同）、長谷川一郎（同）、菊池　実（群馬県埋蔵文化財調査事業団）、佐藤元彦（同）、伊藤正雄（株式会社東日本重機）、綿田弘実（長野県埋蔵文化財センター）、大工原豊（安中市教育委員会）、岩井常充（地権者）、清水卯三郎（同）、長野原町教育委員会、群馬県教育委員会

12　発掘調査参加者（敬称略）
　秋山森雄、大野ひろ子、杉木はま子、高橋みさ子、寺嶋アキ江、寺嶋洋子、都丸孝江

凡　　例

1　遺構図の縮尺は原則として　住居跡）１：60、土坑）１：40　である。

2　遺構図中の方位記号は磁北を指す。

3　遺構図中のスクリーントーンは被火部分を示す。

4　遺構図中、断面の基準線は標高を示す。

5　遺構の覆土については、残存する遺構内に２層以上確認出来たものは図示し、１層のみの場合は表記とした。

6　遺物図の縮尺は全て１：４とした。

7　遺物観察表の（　）は推定値を示し、推定不可能な部位は記載していない。

8　遺物観察表の法量欄ⓑ底径では、台部のつく器種は便宜上台部径の数値を記載した。

9　写真図版における遺物写真の縮尺は不統一であり、実測図を参照されたい。

10　本文と写真図版の遺物番号は一致する。

目　　次

序　文
例　言　　凡　例

第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章　遺跡の立地と環境 …… 1
第３章　調査の概要 …… 3
第４章　検出された遺構と遺物 …… 4
　1　住 居 跡 …… 4
　　２号住居跡 …… 4
　　１号住居跡 …… 8
　2　土　坑 …… 12
第５章　成果と問題点 …… 14
　1　はじめに …… 14
　2　二軒在家二本杉遺跡２号住居の特徴 …… 14
　3　考察およびまとめにかえて …… 16

図版目次・表目次

図１　立地と周辺の遺跡 …… 2
図２　基本層序 …… 2
図３　遺跡全体図 …… 3
図４　２号住居跡平・断面図 …… 5
図５　２号住居跡平面図(2) …… 6
図６　２号住居跡出土遺物実測図 …… 7
図７　１号住居跡平・断面図 …… 9
図８　１号住居跡出土遺物実測図 …… 10
図９　土坑平・断面図 …… 13

表１　１号住居跡出土遺物観察表 …… 11
表２　土坑計測表 …… 12

写真図版目次

図版１　遺跡概況
図版２　１号住居跡
図版３　　同
図版４　　同　　出土遺物
図版５　２号住居跡
図版６　　同
図版７　　同
図版８　　同
図版９　　同　　出土遺物
図版10　土　坑
図版11　５号土坑及び遺構外出土遺物
図版12　遺構外出土遺物、調査参加者

（註　16ページよりのつづき）

註13　石坂　茂ほか　「仁田遺跡・暮井遺跡」　群馬県教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団　1990

註14　「行田Ⅰ遺跡・行田Ⅱ遺跡現地説明会（資料）」　松井田町遺跡調査会ほか　1989、及び本遺跡（旧称　行田Ⅰ遺跡）の調査を担当された長井正欣氏（山武考古学研究所）より御教示頂いた。

註15　註５の文献において、出入口部の埋甕について「幼児埋葬、胎盤収納、建築儀礼に関わる施設等、性格付けは一定していないが、いずれも屋内祭祀施設とする点ではほぼ一致している」と紹介している。

註16　註９の文献による。

第1章　調査に至る経緯

平成3年3月、（株）キャロッセより松井田町地域開発対策委員会へ工場建設に関する事前協議書が提出された。これを受けて同会は町教育委員会に文化財保護に関する意見書の提出を求めた。開発予定地は縄文～土師器を伴う集落が確認された八城二本杉東遺跡の東側隣接地にあたり、また当地内においても同時期の土器片の散布が見られることから、教育委員会では事前調査の必要ありと回答した。これに理解を示した業者側の回答を受けて、6月13日～15日に試掘調査を行なった結果、住居跡2軒と数基の土坑の存在が明らかになった。この結果を踏まえ、町教育委員会と（株）キャロッセとの間で協議したところ、業者側より発掘調査の依頼がなされたため、町教育委員会はこれを受け、関係法令の手続を経て8月19日から調査を開始した。尚、調査にあたっては同委員会内に事務局を置く松井田町埋蔵文化財調査会と（株）キャロッセとの間に平成3年8月10日付で調査委託契約が結ばれ、これに基いて同調査会が調査を行なった。

第2章　遺跡の立地と環境

本遺跡は、群馬県碓氷郡松井田町二軒在家字二本杉に所在する。北東約700mには一級河川である碓氷川が安中市へと流下しているが、ここはその右岸に形成された河岸段丘の上位段丘面であり、また、妙義山から派生して行田、越泉を経て上人見から安中市中野谷へと続く西横野丘陵の北斜面中腹でもある。この丘陵は本遺跡より南方500mの頂部では本町と妙義町の、また東方に至っては安中市と富岡市との境界であるとともに碓氷谷と鏑谷の分水嶺をなしている。

さて、遺跡地付近においては丘陵の傾斜は比較的なだらかであるが、途中、小河川の開析によると思われる小台地が東方に延びる形で形成されており、この南東部に本遺跡が立地している。ここより北方300mの丘陵北麓際には碓氷川に流入する柳瀬川が流れ、また小台地の両脇は降雨時には小さな沢として雨水を集めていたと思われ、水に関しては良好な条件を備えていたと思われる。日射条件においても、南～西方が丘陵頂部まで緩傾斜のために比較的良好であったと言えよう。現在、この付近は畑地として桑、こんにゃく等を中心に耕作されており、この丘陵の南北両麓では流下する雨水を利用した水田地帯が東西に長く続いている。この丘陵を南北に横断する形で上信越自動車道上越線のコースが決定し、道路建設に先立つ発掘調査が行なわれ、多くの成果をおさめている。

さて、次に本遺跡周辺の遺跡分布状況を概観してみる。1は本遺跡と同丘陵上に立地し、昭和40年の調査で弥生中期の遺物が検出されている。この丘陵上においては古くから縄文および弥生時代の遺物の散布が数多く知られており、当期の集落が存在する可能性が極めて高い場所である。2～7および9は横穴式石室の小円墳で、墳丘を確認し得る9以外は全て大半もしくは全体を削平され、石室の一部が残存するのみといった状況である。8は昭和46年の調査で奈良～平安時代の住居跡が確認されている。10は平成2年の調査で浅間B軽石直下の平安時代水田跡が検出された。11と12は上信越自動車道建設に伴う調査で、11は縄文時代前期の集落を中心に中期から後期までの遺構、遺物が多く検出され、特に主体部に板状敷石を施す柄鏡形敷石住居跡の存在は本遺跡とは敷石形態を異

にしている点で興味深い。12は本遺跡に隣接しており、縄文時代前期と中期の住居跡および遺構、遺物の他、弥生時代の土器、平安時代の住居跡が検出され、本遺跡の平安時代住居跡との関連性が考えられる。

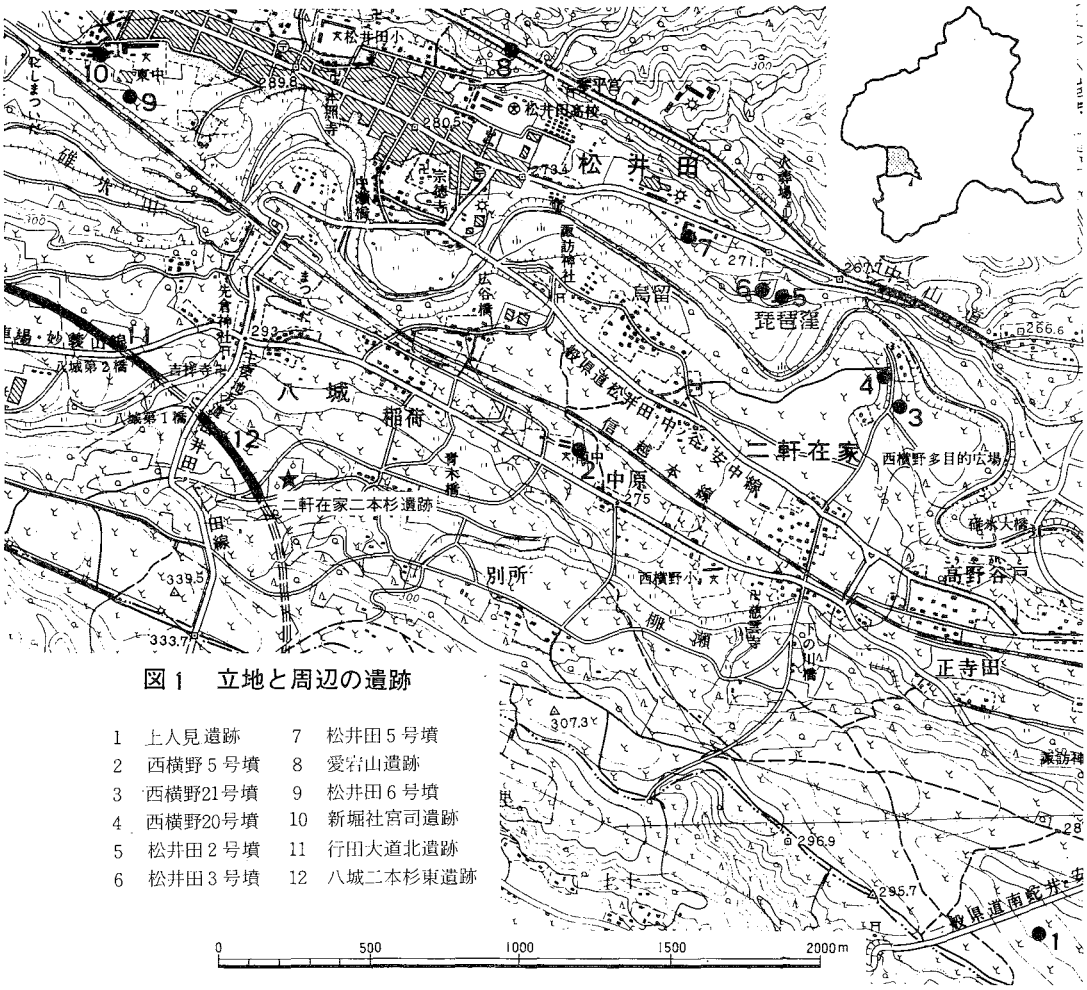


図1　立地と周辺の遺跡

1　上人見遺跡
2　西横野5号墳
3　西横野21号墳
4　西横野20号墳
5　松井田2号墳
6　松井田3号墳
7　松井田5号墳
8　愛宕山遺跡
9　松井田6号墳
10　新堀社宮司遺跡
11　行田大道北遺跡
12　八城二本杉東遺跡

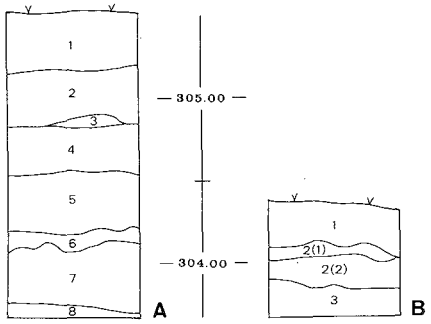


図2　基本層序

A地点　1　耕作土。浅間A軽石を多量に含む。
2　1層に近いがA軽石は少量。
3　浅間B軽石純層。径0.5～0.8mm。
4　黄色軽石粒を含む黒色土。
5　黄色軽石微粒を含む暗褐色土。
6　ローム漸移層。
7　ローム層。非常に堅い。
8　YP層。径5～20mm。

B地点　1　耕作土。YPを含む。
2(1) YP上層。径1mm程の砂層。
2(2) YP下層。径5～20mmの軽石層。
3　粘質砂層。

第３章　調査の概要

〈方法〉 開発予定地は丘陵の南東緩斜面に位置し、また西側隣接地は上信越自動車道建設に伴う事前調査で遺跡が確認されており、当初から遺跡の存在が予想された。確認調査では、先ず区域内に任意の中心軸を設け、これに直交する形で全域をカバーし得る10m間隔のトレンチを掘削して土の堆積と遺構の分布状況を確認した。そしてこの結果をもとに本調査区域を設定し、重機で表土を除去した。表土は耕作土として攪乱がローム層まで達していたためにこのローム上面を確認面とした。遺構精査では住居跡は十文字およびキの字、ピット類は一文字か半截でセクションを確認、記録した。図化にあたっては、区域内に任意の方向で10m間隔（またはメートル単位）の基準杭を設け、１m方眼を組んで作図の基線とした。また、全体図は1/100とし、平板によった。記録写真はモノクロとカラースライドの35mmフィルムを使用した。なお、整理作業については例言、凡例を参照されたい。、

〈経過〉 調査に先立って、調査区西方の県道の三角点よりレベル移動を行なった。そして８月19日、重機による表土除去および用具類やテント運搬。21日に作業員が入りテントの組立の後に平面精査を開始した。あわせて測量用基準杭の設定とレベリングを進め、全域のマーキング状況を撮影し、27日より遺構精査にとりかかった。精査は土坑から始め、次に現地で１号とした平安時代住居跡、そして２号とした縄文時代住居跡の順に行なった。そして遺構の作図、撮影と共に全体図を作成し、調査区の基本土層の図化をもって現地作業を完了した。この間、度重なる台風の影響で遺構が埋没し、土砂の除去作業に費した時間も多かった。

整理作業は遺物の洗浄、注記から復元、実測、トレース、写真撮影と進め、並行して遺構図の点検、トレース、各部の原稿作成を行なった。

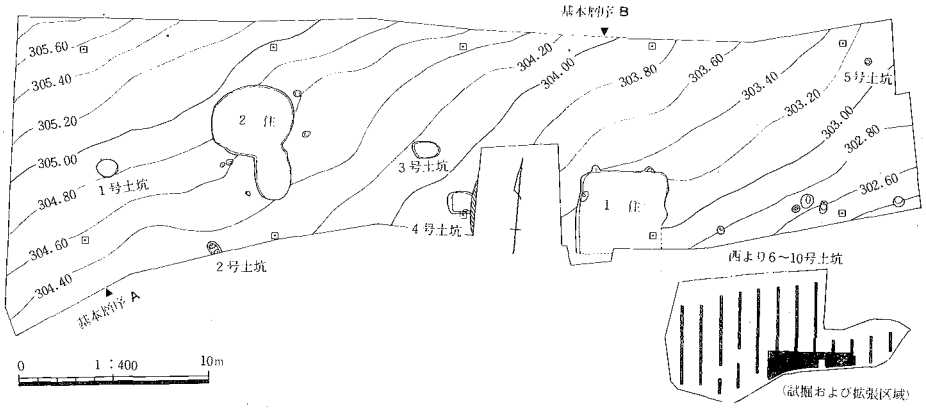


図３　遺跡全体図

第４章　検出された遺構と遺物

〈概要〉 本遺跡では住居跡２軒、土坑10基が検出された。このうち住居跡は縄文時代と平安時代に属し、土坑では縄文時代１基と須恵甕片を伴うものが１基であり他は遺物を伴わない時期不明の土坑である。また縄文時代の住居跡に近接して小土坑が５基検出されており、住居に伴う可能性も考えられるために一応住居と包括して扱い土坑自体のナンバリングは行なわなかった。遺物は概ね遺構に伴うものでそれ以外にも若干出土し、全体量としてはさほど多くはない。以下、各遺構について詳細を述べる。

１　住居跡

〈２号住居跡〉

主軸方位　Ｎ－26°－Ｗ

形　　状　いわゆる「柄鏡形」を呈す。主体部は主軸方向からみて両側がやや長い楕円状で張出部は少々左に傾いている。

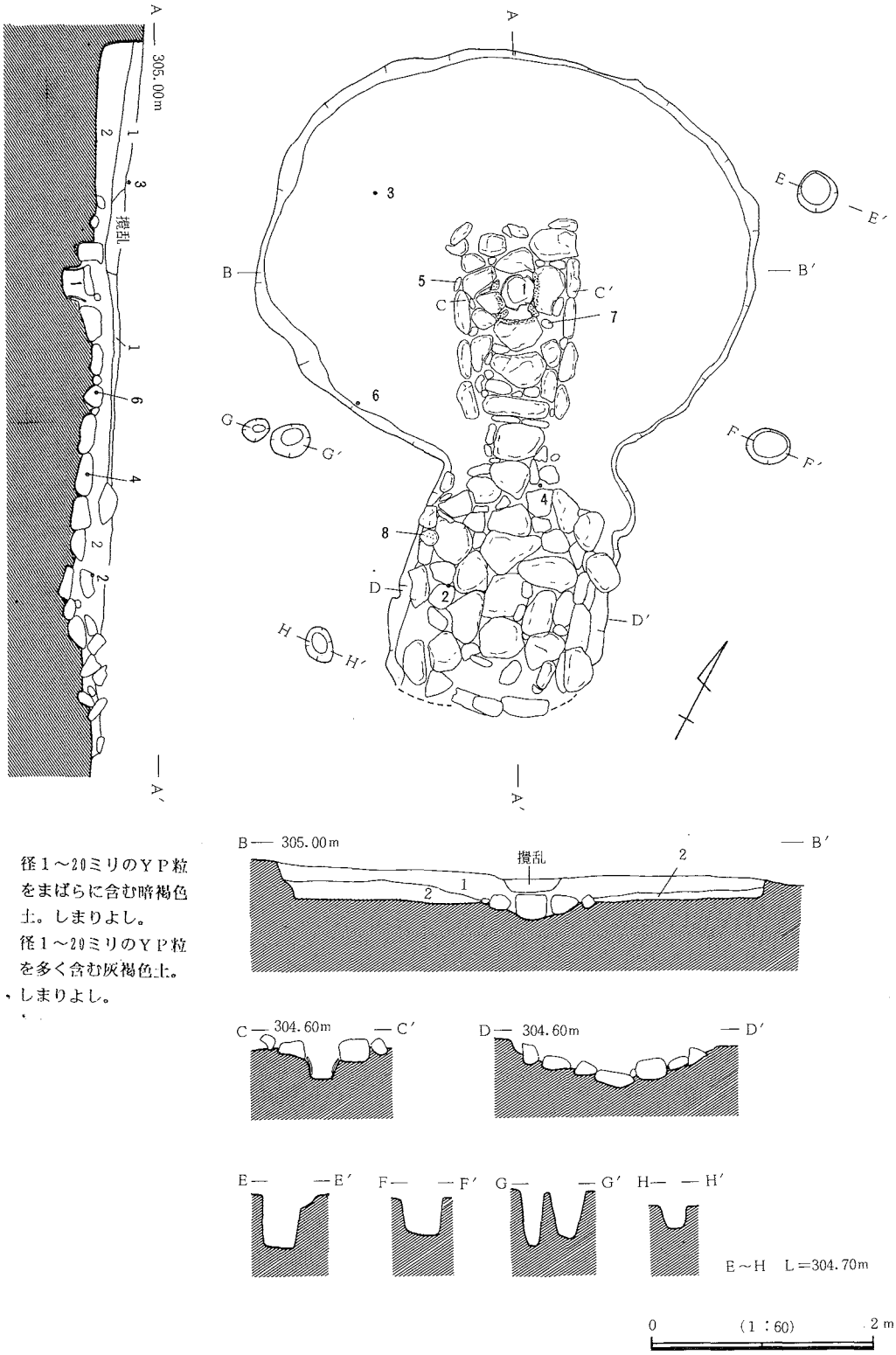
規　　模　張出山南端の掘り込みが検出出来なかったため原位置を保っていた端部の石で計測すると長軸 6.0ｍ、主体部の長径は 4.5ｍ、短径 3.7ｍ内外、張出部は中心で長軸 2.3ｍ、短軸 1.84ｍである。壁残存高は主体部北西部で42㎝、南東部では17㎝を測り、張出部では配石のため不明確ながら中心付近で10㎝程度である。

炉　主体部中央やや南寄りにある。四方に径20～30㎝、厚さ15～20㎝程の大形の自然石を配してほぼ方形状の囲みをつくり各コーナーには縦長の小石を立石状に置く。内部は長径35㎝×短径30㎝のピットで下半部が欠損する深鉢が埋設されている。囲っている石の上面はほぼ同じレベルでここからピット底面までは34㎝、石下面（ピット上端）からは約15㎝の深さである。石内側は被火のために赤変し、北側の石においては大きく剝離、また西側では割れていた。また土器の上面には平石が検出されている。土器内の覆土は上～中位にＹＰ混じりの黒色土で下位にはさらに粘質土が混在し、焼土や炭化物は含まれない。ピットと土器のすき間には焼土及び炭化物を全体に含む黄褐色の粘質ロームが認められた。

覆　　土　２層に分層出来た。上下層共にＹＰ微粒を含み、上層は暗褐色土、下層はやや明るめの灰褐色土である。

壁　　面　ＹＰを多く含むローム層で比較的脆い。

床　面・敷石部　ある程度地形に沿った緩やかな斜面で主軸北端に比べて南端が約20㎝低い。貼床は検出されず壁面と同様ＹＰ混じりのロームで床としてのしまりにはやや欠ける。張出部全域から主体部中央にかけては敷石部となっており、張出部の楕円状敷石部と主体部の長方形敷石部及び中間の連結部に分けることができる。主体部敷石はおよそ 1.8ｍ× 1.1ｍの長方形で左右の長辺には長さ35～40㎝の不整角柱状礫を対照的に配し、連結部との区



1　径1～20ミリのＹＰ粒をまばらに含む暗褐色土。しまりよし。

2　径1～20ミリのＹＰ粒を多く含む灰褐色土。しまりよし。

図 4　2号住居跡平・断面図

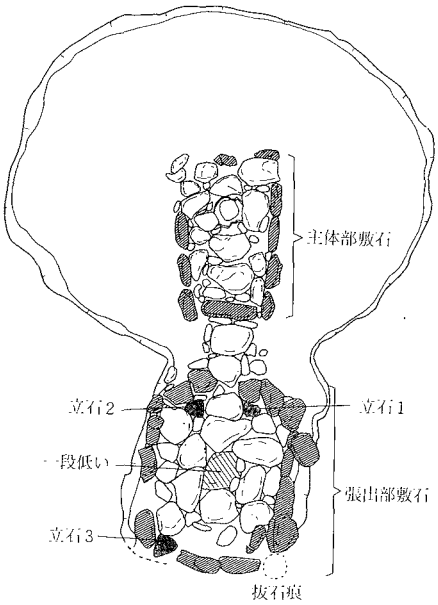


図5　2号住居跡平面図(2)（1：80）

画にはさらに大きな石を用いる。内部は扁平な大型の自然石とそれよりも小さな自然石を敷きつめて平担に仕上げてあり側面の石上面とは5～8㎝低い。北側の区画は判然としないが部分的にそれらしき石が残存している。一方、張出部では主体部より大型の不整角柱状礫及び自然石を周囲に配す。部分的に石が2段に重なり、除去した石の中にも周囲からの崩落らしき状況も見られたことから本来は2段かそれ以上の積み石であったと推測される。内部は主体部と同様に一段低く石が敷かれ、中心部はさらに10㎝低いレベルに扁平な大型自然石を据えて同程度の石6個でこれをとり囲んでいる。また、立石が3箇所に見られた。立石1と2はずんぐりした角柱状礫を使用しており敷石面より約12㎝突出する。立石3は大きな三角柱状を呈し約20㎝の突出である。立石3と対応する南東隅には径30㎝程の土坑状の凹みがありここにも立石を配したことを窺わせる。なお立石1～3は地山面下25～30㎝と他の石よりもしっかりと据えられていた。その他、敷石部分は全体的に被火が認められた。

土　坑　住居プラン内には検出されない。周辺より5箇所の小さな土坑が検出されたが覆土あるいは位置等からは本住居に伴うとは判断し難い。

遺　物　図6に示したように伴出遺物は少ない。1は炉に埋設された深鉢形土器である。口縁部から胴部中位までほぼ一周残存し以下は欠損する。無文の粗製品で非常に脆弱である。口径31.5㎝。2は小型の深鉢型土器で張出部左側の石積崩落下と炉覆土の破片が接合した。内湾する口縁部の外面に刻目のある隆帯を付し一部に刺突で8字状を示す貼付文を伴う。器面は内外共に雑なナデで一部ミガキ状になっている。口径は推定で11.2㎝で暗灰褐色を呈す。3は基部を欠損する撥形の打製石斧である。残長 8.2㎝、刃部幅 5.5㎝、厚さ 2.7㎝、重量 120gで刃部は所々剝離し自然面はない。石質は凝灰質砂岩。主体部西側の覆土上位より出土した。4は角柱状を呈す磨石で全長16.3㎝、中心幅 3.9㎝、重量460gを測る。各面共に平担で図示した上下面のみ少々磨滅部分が認められる。両輝石安山岩。5は全面自然面で「足形」状を呈す。全長12.3㎝、中心幅 4.8㎝、重量360g。6は扁平な小石の両端に切り込みのつく切目石錘である。全長 7.5㎝、中心幅 4.1㎝、厚さ 1.2㎝、重量 68g を測り石質は千枚岩。7は磨石と思われる。裏表両面に楕円形の磨滅面が認められ一部には敲打痕も残る。全長10㎝、中心幅 3.9㎝、重量460gで石質は両輝石安山岩。8は張出部の西側積石となっていた多孔石で全長17㎝、中心幅14.6㎝、重量3.310g を測る。明確な断面円錘形の凹みが計10箇所と他に浅く小さな凹みが少々。石質は両輝石安山岩で脆化して全体にヒビが入る。化に主体部覆土上位よりチャート片数片及び中位より無文の土器小片4点と下位より凝灰質砂岩の剝片が検出されている。

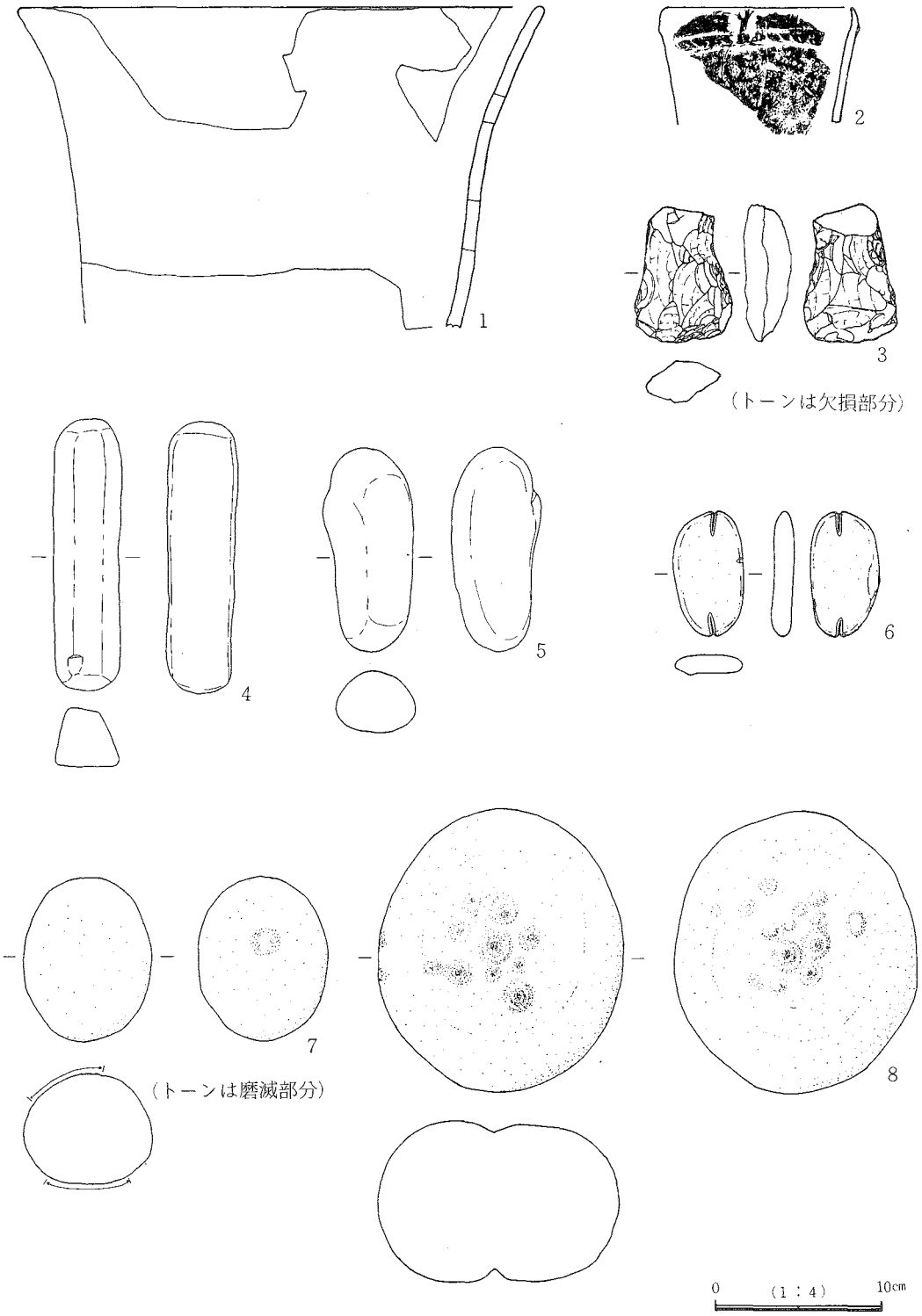


図６　２号住居跡出土遺物実測図

〈1号住居跡〉

主軸方位　N－84°－E

形　状　隅丸方形と思われる。

規　模　カマド北側で東西 4.5m、南北はB－B′に南壁と思われる立ち上がりが確認され、この位置で 4.5m を測る。住居確認面が北西～南東へ傾斜しているために壁の残存は北西部で約60cmと深く、西壁中央40cm、北壁中央45cm、東壁北側で25～30cmである。

重　複　なし。

カマド　東壁中央付近に付設される。1m×60cmの楕円形の掘り込みが残存し、煙道先端は削平されていた。側壁は自然石を構築材とする。燃焼部の中心は壁内にあり、ボウル状を呈する底面は焚口より約10cm低く、地山であるローム面を火床としてある。覆土は下層が天井崩落層と思われる粘質土、上層は炭化物及び少量の焼土を含む暗褐色土であった。

覆　土　基本的に2層に分層出来た。

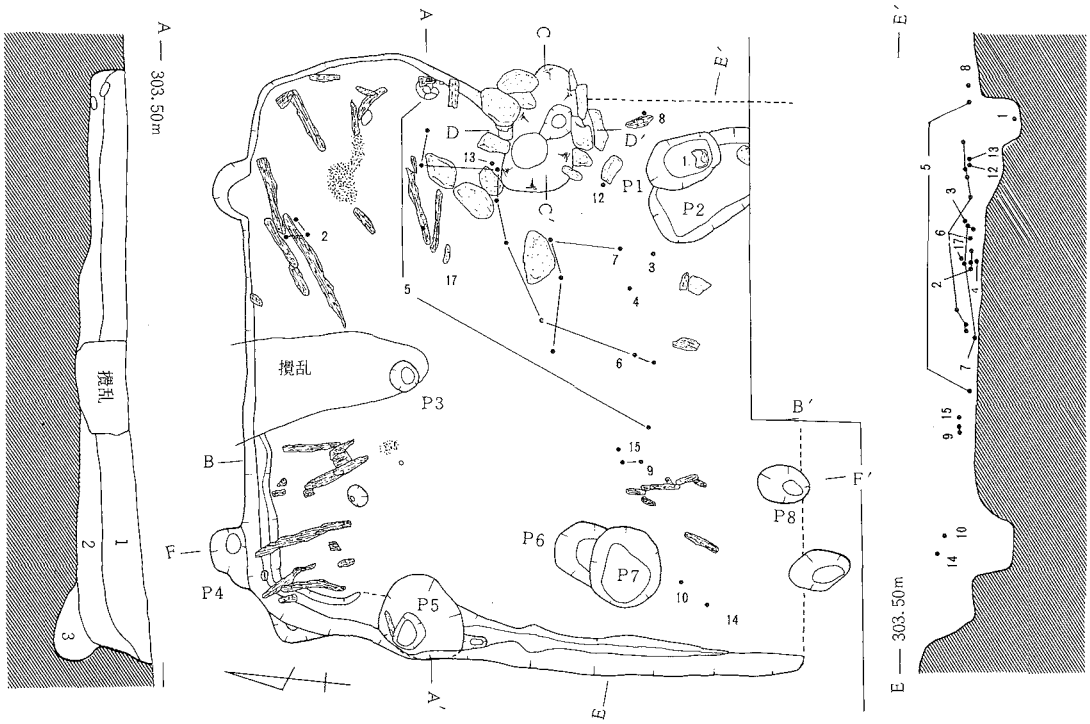
床　面　貼床は全く検出されず、地山であるローム面を床面としている。また、被火のために焼土化している部分（スクリーントー部分）が僅かに認められた。

土　坑　P1～P8が本住居に伴うものと思われる。貯蔵穴P1は径60×40cm、深さ30cmでP2は貯蔵穴に接する10cm弱の浅い凹み状。P4は北壁上から外側にかけて掘り込まれる小ピットで、これと対応する北壁東側には半円状の突出が認められている。しかしながらこれはピットにはなっておらず、性格的にP4と同一であるかは断定出来ないが、いわゆる壁（支）柱穴の可能性があろう。主柱穴とされる土坑は検出されていない。P3は径26cm、深さ35cm、P5は径約70cm、深さ40cmで西壁際から外側に向かってえぐれるように掘り込まれている。覆土はローム混じりの褐色土でしまりの悪いものであった。P6とP7は殆んど同一であり、浅いP6が深さ45cmのP7に接している。P8は径60×45cm、深さ60cmの楕円形を呈す。西隣の土坑は南壁推定ライン外で覆土も異質なことから本住居のものとしなかった。

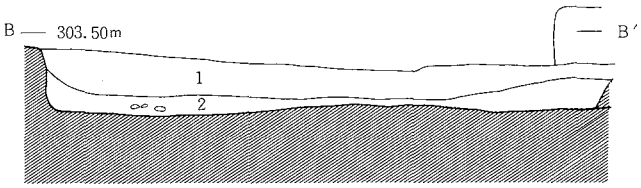
周　溝　住居北西部に検出されている。各部ともに住居上端から周溝下端まで落ち込み、緩やかに床面へ立ち上がる形状である。床面からの深さは5～6cm。

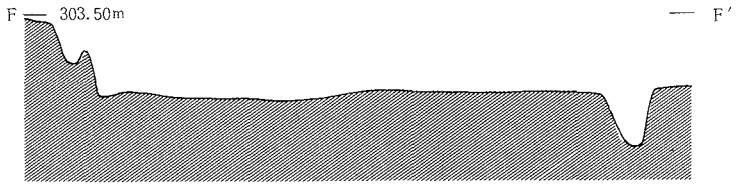
遺　物　覆土第1層中位から床面直上で検出されている。貯蔵穴P1より須恵坏、カマド内より土師甕片、他に須恵埦、甕片、灰釉坏片、こも石状礫などがあり図8に示した。また、ほぼ放射状の状態で床面直上より炭化材（径10～15cm内外）が検出された。

備　考　本住居跡はその形状及び付属施設、また伴出遺物から9世紀末～10世紀にかけての所産と考えられる。また、炭化材が床面直上から検出されたことについては、その状況等より垂木材が崩落して炭化したものと思われる。



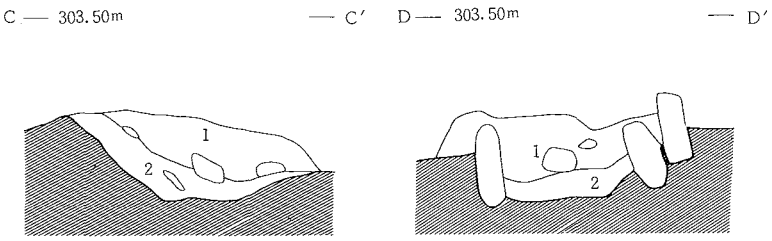
1　黄白灰色及び軽石微粒を全体に含む黒色土。
2　1層の微粒子とロームブロックを少々含む暗褐色土。しまり弱い。
3　ロームブロックを全体に含む褐色土。しまり弱い。





0　(1：60)　2m

1　炭化物と焼土ブロックを含むしまりの弱い暗褐色土。
2　天井崩落層。灰褐色粘質土でバラつく。



0　(1：30)　1m

図7　1号住居跡平・断面図

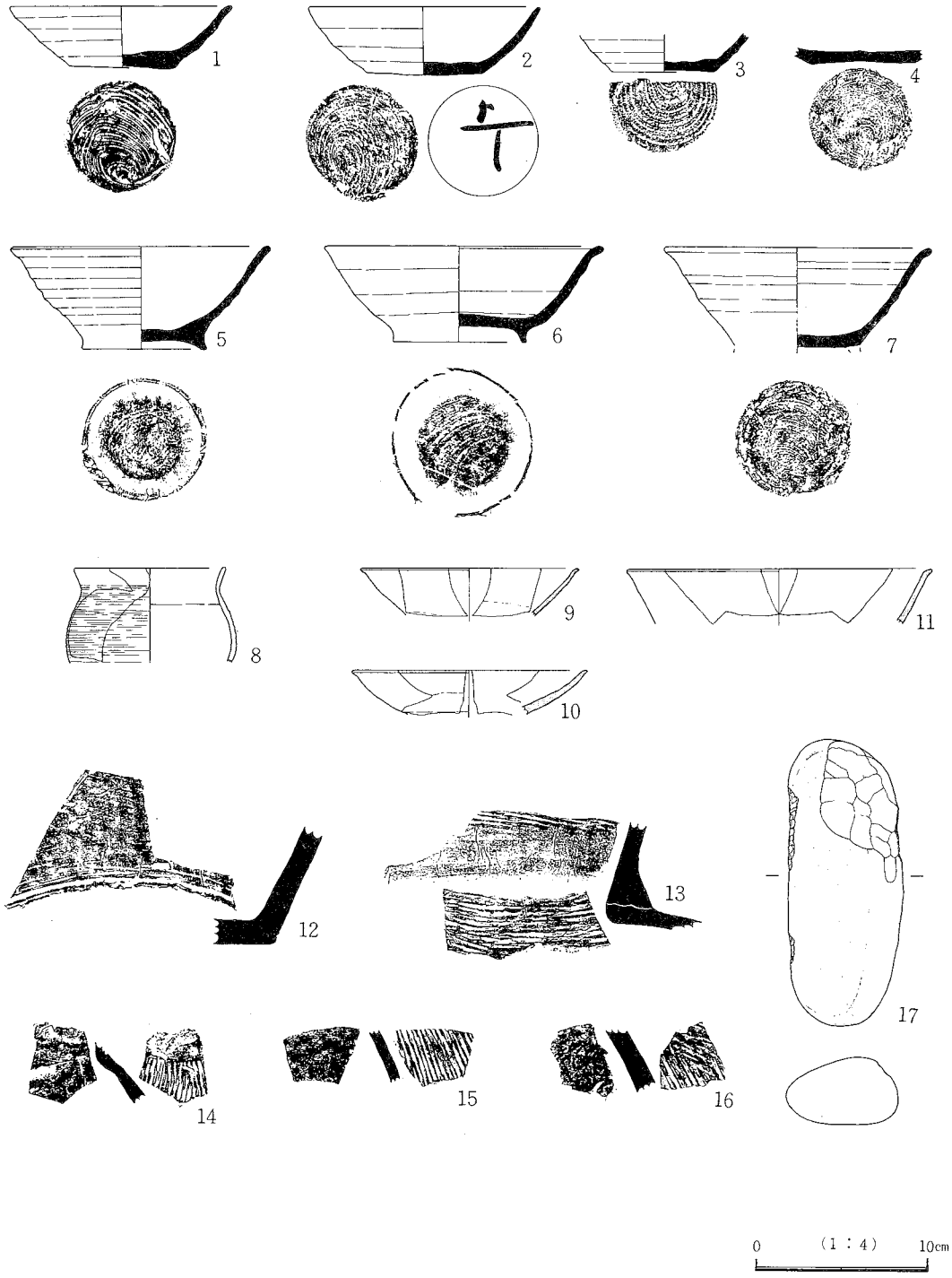


図８　１号住居跡出土遺物実測図

表1　1号住居跡出土遺物観察表

法量：ⓐ口径　ⓑ底径　ⓒ器高　ⓓ最大径

No.	器種	法量(cm)	形態・手法・焼成・他	色調	残存	出土
1	須恵器 坏	ⓐ 13.0 ⓑ 6.3 ⓒ 3.6	底部はやや厚めで口縁部は外反気味に立ち上がる。 底部右回転糸切り無調整。焼成良好。	白灰色	完形	貯蔵穴内
2	須恵器 坏	ⓐ (13.6) ⓑ 6.8 ⓒ 4.0	内湾気味に立ち上がり口縁部はやや外反。底部右回転糸切り無調整。焼成良好。底部外面に墨書が認められるが判読不明。	暗褐色	60%	床面直上
3	須恵器 坏	ⓐ — ⓑ 6.2 ⓒ —	底部右回転糸切り無調整。焼成は焼き締まりがなく軽量。	白灰色	20%	覆土下位
4	須恵器 坏	ⓐ — ⓑ 6.1 ⓒ —	底部右回転糸切り無調整。焼成は焼き締まりがなく軽量。 底部のみ一周残存。	白灰色	20%	覆土下位
5	須恵器 、　埦	ⓐ 15.0 ⓑ 7.2 ⓒ 6.1	張りのない腰高の体部より口縁部は僅かに外反。台部は短かく外傾する。底部右回転糸切り後台部貼り付け回転ナデで外面中程に爪状圧痕の円列。焼成不良。	黄灰色	完形	床面直上
6	須恵器 埦	ⓐ 16.5 ⓑ 7.9 ⓒ 5.7	体部下位がよく張り口縁部は強く外反。底部右回転糸切り後台部貼り付け回転ナデ。焼成良好。	黄灰色	70%	覆土中位
7	須恵器 埦	ⓐ (15.3) ⓑ — ⓒ —	張りのない体部より口縁部は短かく外反。底部右回転糸切り後台部貼り付け回転ナデで外面中程に爪状圧痕の円列あり。焼成不良。	白灰色	60%	覆土中位
8	土師質 小型甕	ⓐ (9.0) ⓑ — ⓒ —	非常に薄手の小型甕。外面はカキ目、内面はロクロ痕が残る。焼成良好。	暗褐色	小片	覆土下位
9	灰　釉 坏？	ⓐ (13.0) ⓑ — ⓒ —	薄手で口縁部は尖り気味に突出する。施釉部は白濁し、さほど光沢をもたない。	白灰色	小片	覆土中位
10	灰　釉 坏？	ⓐ (14.0) ⓑ — ⓒ —	口縁部少々突出。施釉部は少々発泡しているがよく光沢をもち発色している。	淡緑色	小片	覆土上位
11	灰　釉 埦？	ⓐ (18.0) ⓑ — ⓒ —	口縁部尖り気味に短かく外反。残存部全面に施釉され内外面共に光沢・発色良好。	淡緑色	小片	覆土下位
12	須恵器 壺？	ⓐ — ⓑ (17.0) ⓒ — ⓓ —	平底の壺と思われる底部～体部下位片。内外面横ナデで底部内面は雑な指ナデ痕。焼成良好。	白灰色	小片	覆土中位
13	須恵器 甕	ⓐ — ⓑ — ⓒ — ⓓ —	甕頸部片。外面は平行叩き目で頸～肩部境目は横ナデ。内面は頸部横ナデ、肩部側は青海波文あて目が残る。接合部が割れ口となっている。焼成良好。	青灰色	小片	覆土中位
14	須恵器 甕	ⓐ — ⓑ — ⓒ — ⓓ —	甕肩部片。外面は縦の深い平行叩き目でその後頸部との境を横ナデ。内面は無文あて目。焼成良好。なおNo.14とNo.15は同一個体。	灰　色	小片	覆土中位
15	須恵器 甕	ⓐ — ⓑ — ⓒ — ⓓ —	体～肩部付近片。外面縦～斜位平行叩き目で内面はかすかな無文あて目。焼成良好。No.14と同一。	灰　色	小片	覆土中位
16	須恵器 甕	ⓐ — ⓑ — ⓒ — ⓓ —	外面は斜位に交差する平行叩き目で内面は青海波文あて目。焼成良好で硬質である。	青灰色	小片	覆土下位
17	石	全　長　17.0 中心幅　6.8 重　量　735g	こも石状を呈す。図右上部は剝離状に欠損し何らかの使用痕と思われる。また側面には敲打痕と思われる磨滅部がある。表面～側面は煤により(？)黒ずむ。	暗灰色	完形	覆土中位

2　土　坑

〈1号土坑〉

2号住居跡西方約5ｍに位置する。試掘時に西半分を確認し覆土上位より縄文土器片1片（無文、時期不明）が検出された。断面形は底面が平担な浅いフラスコ状で壁及び底面は堅いローム。底面には被火らしき赤化が認められた。覆土は軽石微粒を含むよくしまった暗褐色土であった。

〈2号土坑〉

2号住居跡南方の調査区域際で検出。残存部は楕円形を呈し内部両端は中央より低く掘り込まれる。地山は1号土坑の覆土になっているしまった暗褐色土で下半部からはローム層上部となる。覆土上位より重なる状態で自然石2個が検出された。土器類は全く検出されない。

〈3号土坑〉

調査区中央付近に位置する。地山はＹＰ主体でまばらに黒色土が混じる軟弱なもの。覆土は軽石微粒及びローム粒を含むしまりのない黒色土1層のみであった。遺物は検出されない。

〈4号土坑〉

3号土坑の南東2ｍに位置する。地山は灰褐色ロームに黒色土が混じり軟弱である。覆土は3号土坑と同じ。南壁中央下半は小さな舌状の突出が認められた。遺物は検出されない。

〈5号土坑〉

調査区北東端部に位置する。楕円形の小土坑で残存する掘り込みも浅い。地山は3号土坑と同様で軟弱。覆土もしまりのない黒色土で底面に須恵甕片を伴っていた。

〈6号土坑〉

6号から10号までは調査区南東部に検出された土坑群である。本土坑はそのうちの西端にあり、1号住居跡東壁から東方約3ｍを測る。底面は狭く掘り込みは浅い。地山はしまりのある暗褐土で覆土は3号・4号と同様のしまりのないものである。遺物は検出されない。

〈7号・8号・9号土坑〉

3基の小土坑が近接しており西から7号、8号、9号とした。中央の8号土坑は他より大きめの楕円形で擂鉢状の断面を呈す。7号、9号は共に壁西側に段を有している。また底面の最下部が東に寄る傾向が3基に共通して見られる。地山は2号と同様に上半部はしまった暗褐色土、下半部はローム面である。覆土は6号他と同様、遺物は検出されない。

表2　土坑計測表

	平面形	長径×短径(cm)	最深値(cm)	備　　考
1	円　　形	113×100	35	覆土上位に縄文土器片
2	楕 円 形	× 58	54	覆土上位に礫×2
3	楕 円 形	140×100	13	
4	隅丸方形	×120	26	東は攪乱のため不明
5	楕 円 形	48× 33	11	覆土下位に須恵甕片
6	楕 円 形	56× 43	20	
7	楕 円 形	45× 38	35	
8	楕 円 形	83× 66	40	
9	楕 円 形	68× 48	55	
10	楕 円 形	50× 43	54	

〈10号土坑〉

南東端部に位置する。地山は上部が暗褐色土で大半はロームとＹＰの混在となっている。他より掘り込みが深く断面U字状。遺物は伴わない。

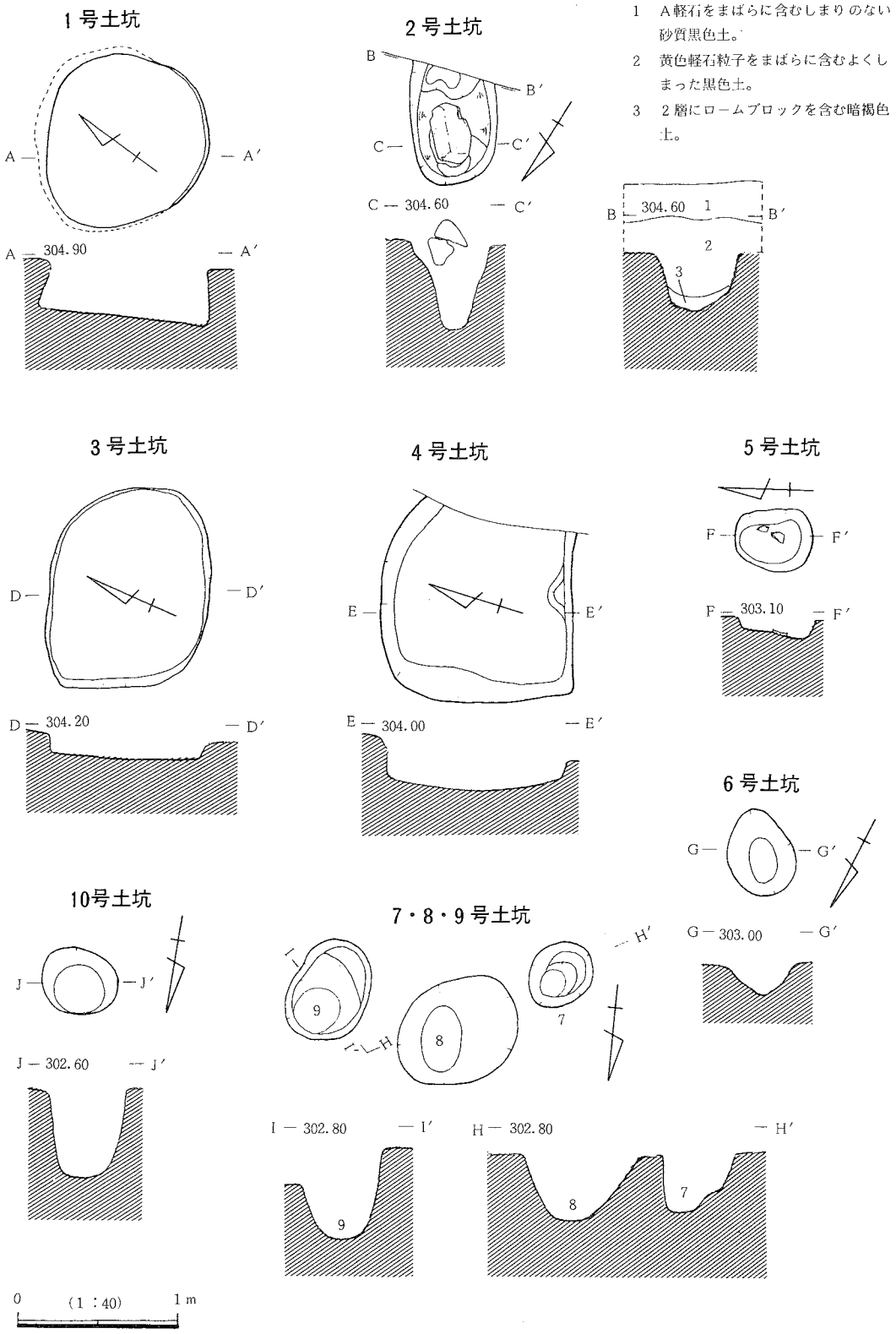

1 号土坑
A
A′
A — 304.90
A′
2 号土坑
B
B′
C
C′
C — 304.60
C′
1　A軽石をまばらに含むしまりのない砂質黒色土。
2　黄色軽石粒子をまばらに含むよくしまった黒色土。
3　2層にロームブロックを含む暗褐色土。
B
304.60
1
B′
2
3
3 号土坑
D
D′
D — 304.20
D′
4 号土坑
E
E′
E — 304.00
E′
5 号土坑
F
F′
F — 303.10
F′
6 号土坑
G
G′
G — 303.00
G′
10号土坑
J
J′
J — 302.60
J′
7・8・9 号土坑
I
I′
H
H′
9
8
7
I — 302.80
I′
H — 302.80
H′
9
8
7
0
(1 : 40)
1 m

図 9　土坑平・断面図

第5章　成果と問題点

1　はじめに

本遺跡での検出遺構は住居跡2軒及び土坑10基少々であり、第4章で示したとおりである。各遺構間には重複が無く相対的な新旧関係を把握出来ないため、遺物を伴う遺構においてのみその時代を判断し得た。1号住居跡とした平安時代の住居は2号住居と同様に残存状況は比較的良好であり推定ラインで示した住居南東部分以外では客観的な形態資料を観察出来た。カマドの構築には全て安山岩の自然石を用いてあり、これは後述する2号住居の石材と一致していることから時間的に大きな隔りはあるものの石材入手においては地域的な制約があったことが窺えよう。北壁上に検出されたP4とピット状の突出は規模及び形状共に差異はあるが、位置的にみると壁柱穴の可能性も考えられる。南壁側にはそれらと対応し得るものが検出されていないが調査区外にあたる可能性も否定出来ないであろう。該期の住居跡はプラン内に柱穴の検出されない例が多く、上屋の支え方に問題を投げかけているが、位置的にその中間型とも言える壁柱穴をもつ住居跡例はまだそう多くはない。本住居の構造はそのことにおける一資料としての意義をもつものと思われる。

一方、縄文時代に特異なあり方を示す柄鏡形敷石住居はその性格付けをめぐって諸説あるようであり、「住居」という考え方を疑問視するむきもある。(註1) また、その形態も内部の諸施設において変化がみられ一様にはとらえられない。近年、群馬県内においても他県同様に資料の蓄積が進む中で同遺構の検出例も確実に増えており、比較検討を行なう研究者も多い。そこで本章では、本遺跡の2号住居とした柄鏡形敷石住居について、その特徴をまとめ、近年における研究成果においての位置づけを行なうことでまとめにかえることとする。

2　二軒在家二本杉遺跡2号住居の特徴

現在、柄鏡形（敷石）住居の出現は中期後葉とされ、(註2) 後期後半にはその終末を迎えるようである。その間、マイナーチェンジによる変遷が認められ、伴出土器より各タイプの時期がある程度求められている。具体的にはプラン内の敷石部分の形態、（柱穴以外の）土坑や埋甕及び箱状石囲施設のあり方、プラン自体の変化、等々があげられ、山本暉久氏は集落の構成やその分布からみた当遺構の性格づけと共に変遷の過程を4期に分けて提示した。(註3) 群馬県内では近年、田篠中原遺跡、(註4) 荒砥二之堰遺跡(註5) においてまとまった数の柄鏡形（敷石）住居が検出され、各遺跡内での分析及び変遷の検討の結果として先の山本案と重なるところが大きい。このような状況を踏まえ、以下、本遺跡の柄鏡形敷石住居（以下、2号住居と称す）の特徴をみてゆくことにする。

2号住居の大きな特徴のひとつは敷石部分のあり方にみられる。張出部で全面を石で覆っているのに対し、主体部では張出部から続くかたちで中央のみの敷石となっており、統一された大きさの石で区画された主体部敷石は両袖式石室の如く長方形を示している。内部には炉体土器を伴う石囲いの炉が存在する。詳細は不明ながら類例も東京都多摩市(註6) 及び群馬県安中市(註7) で僅かに管見に触れている。安中市では石を横立させて縁取りをしている点で2号住居と共通しており、また、後述する構築石材にも共通点がある。相異点としては張出部と主体部との境にくびれがないことであり

2号住居ではこの連結部のくびれの明確さ故に石室状と言えるのである。また、張出部の縁石においては東西両側面で部分的に2段の積石が観察出来、やや乱れてはいるが3段と思われる所もある。精査の段階で同規模の石を内部より10数個除去していることを考慮すると、縁石が2段以上の積石状であった可能性は強い。筆者の知る限り、積石状を呈す柄鏡形敷石住居としては長野県望月町の平石遺跡に類例があり、これは主体部側を除いて外周を3段及び5～6段の積石で囲う完全なものである。(註8) 平石では使用石材として鉄平石（板状節理の石材、筆者注）と河原石があり、この2つは基本的に使い分けられているようである。すなわち、主体部（平石に主体部の長方形区画はない）では鉄平石を、張出部では積石部（および内部）に河原石を使用している点である。また、2号住居で連結部とした境部分の石による「くびれ」の状況、主軸に直交して置かれる河原石の「框石」の存在は酷似点と言える。使用石材については2号住居では全て自然石（河原石）であり、これは冒頭で述べたように地域的な制約によるものと思われる。平石では状況の違いはあろうが、「張出部の敷石から主体部の敷石は厚手の河原石が敷かれ、炉址においても三方の炉石が鉄平石を使用しているのに対し、主軸方向である南側の炉石は河原石が使用されている」ことについて「張出部から炉までの間が単に機能的ではなく何らかの信仰が存在していたことは確かであり、それに基く構造とみることができる」とし、張出部から炉までの間のあり方を信仰の反映としている。このことは、使用石材の事を抜きに考えてみても、先に述べた「くびれ」、「框石」、また積石といった形態に深く関わっているように思え、非常に興味深い。さらに、2号住居の張出部に検出された4箇所の立石（うち1箇所は推定）もこのことと無関係ではないであろう。

次に、2号住居張出部における石囲いの凹状施設をみてみよう。これは今まで述べてきた「敷石部分のあり方」でもあるが敢えて抽出してみたい。2号住居においては張出部中央に一段低く大型の偏平な自然石を置き、この周りを同程度の石6個でとり囲んでいる。この囲石は他の張出部の敷石とほぼ平担面をなし内部の石上面との差は10～15㎝程である。この意図的な凹みの意味を考えるうえで類似施設として「箱状の石囲い」施設がある。これは現在においては群馬県内にのみ確認されている施設であり、倉渕村権田遺跡(註9)、高山村中山遺跡(註10)、吉井町原西遺跡(註11)、宮城村前田遺跡(註12)、また、松井田町でも仁田・暮井遺跡(註13)、行田大道北遺跡(註14)などがあげられる。この施設について仁田・暮井遺跡報文中では、「板状節理をもつ安山岩を用材として、方形状の囲いだけではなく底面にも配しており」とあり、権田遺跡及び行田大道北遺跡でも全く同形態を示し、その位置も張出部基部と一致している。その意味づけとして仁田・暮井遺跡では底面にも石を配することを「うつわ」の意識の反映とし、かつ位置的な類似性及び他の事例との検討から埋設土器(註15)の転化した形ととらえている。また権田遺跡についての考察(註16)でも、火の使用が認められないこととその位置より、炉とは異なる機能をもち、埋甕（埋設土器）と同様の貯蔵用施設であるとした。2号住居には炉に土器を付設する以外には埋設土器やそれに類する土坑は存在していない。形態や位置は先の遺跡とは異なりつつも、本住居の施設は箱状石囲施設と軸を一にしているのではないだろうか。さらに時期的な視点に立つと、権田遺跡及び行田大道北遺跡では加曽利E4式期、仁田・暮井遺跡では称名寺IC～II式期となっており、本2号住居においては掘之内II式期の土器を伴なっている。このことから、2号住居の施設が箱状石囲施設の流れにあるならば、その変形タイプ、または亜流として後出してきたものだ

と言えるだろう。

以上の事項の他、2号住居では敷石部のほぼ全域にわたって被火が認められた。主体部側においては特に顕著で、炉石の内壁と同程度の赤化も縁石や炉に南接する大型石の上面に見られた。敷石の施されない主体部の床面及び覆土には炭化物や焼土は全く検出されていないこと、また主体部と張出部との被火程度の差異などから焼失家屋としての可能性は考えにくく、他に何らかの理由があると思われる。また、その他の事項として柱穴とされるピットが全く検出されないことがある。第4章でも触れたがプラン外に近接する小土坑にそれを求めることは出来ないであろうし、プラン内においては全く土坑が存在していない。先の敷石部の被火の問題とともにこのことは現段階では類例も見えず、今後の課題と言うほかはない。

3　考察およびまとめにかえて

敷石の平面的な形態においてその特異性を前に述べた。山本氏の4期区分によれば、その第Ⅲ期（発展期）には関東地方では部分的な敷石や無敷石の事例が現れるという。また、埋甕が一気に廃用へと向かう傾向も示されている。2号住居は伴出土器より堀之内Ⅱ式期であり、氏の第Ⅲ期とした後期前半にあたる。本章の2で提示した2号住居の特徴は概ねこの第Ⅲ期に位置付けられ、その中での地域色として箱状石囲施設や本住居の石囲施設が存在するようである。また、平石遺跡との比較検討を行なった張出部の石積みの問題及び張出部から主体部にかけての信仰意識の可能性は本遺跡の立地からくる中部地方との共通点とも言える。さきの第Ⅲ期の特徴のひとつとして、張出部のもつ埋甕祭祀の意識が薄れ、出入口部としての役割が残存することがあげられている。2号住居の堀之内Ⅱ式期、平石遺跡の堀之内Ⅰ～Ⅱ式期という時期を考慮したときに、共に埋甕及び土坑の検出されないこれらの住居において祭祀意識がどの程度、またどんな形で存在していたのか、浅学の筆者には論じ得ない。しかしながら、本町の縄文時代の遺跡においては日常的に中部地方の土器が伴出しており、地域的なつながりが強く示唆されることを考えれば、相互の地域における共通の文化及び意識の反映としてある種固有の祭祀意識なり形があったのかもしれない。類例の僅かな現時点では憶測論の域に留まるのみであり、このことは資料の増加を待って今後考えてゆきたい。

註1　山本暉久「敷石住居」（縄文文化の研究〈8〉雄山閣　1982）内で江坂輝弥氏の非住居説を紹介している。
註2　菊池　実、飯塚　聡ほか　「田篠中原遺跡」　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1990　において加曽利E3式期の住居が7軒検出されている。
註3　註1の文献による。
註4　註2の文献による。
註5　徳江秀夫ほか　「荒砥二之堰遺跡」　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985
註6　中島庄一ほか　「多摩市道1458線遺跡」　同遺跡調査会　1978
註7　大工原豊氏（安中市教育委員会）の御好意により未発表の資料を実見する機会を得た。
註8　福島邦男　「平石遺跡」　長野県望月町教育委員会　1989　において15号住居、16号住居に積石が存在している。
註9　教材「群馬の文化財－原始・古代編－」　群馬県教育委員会　1979　内で本遺跡の紹介及びその考察がなされている。
註10　秋池　武　「中山遺跡」　群馬県史　資料編1　群馬県史編さん委員会　1988
註11　群馬県埋蔵文化財調査事業団において1990年に発掘調査され、現在整理中とのこと。
註12　宮城村教育委員会において1987年に発掘調査され、現在整理中とのこと。

（以下、巻頭部分へつづく）

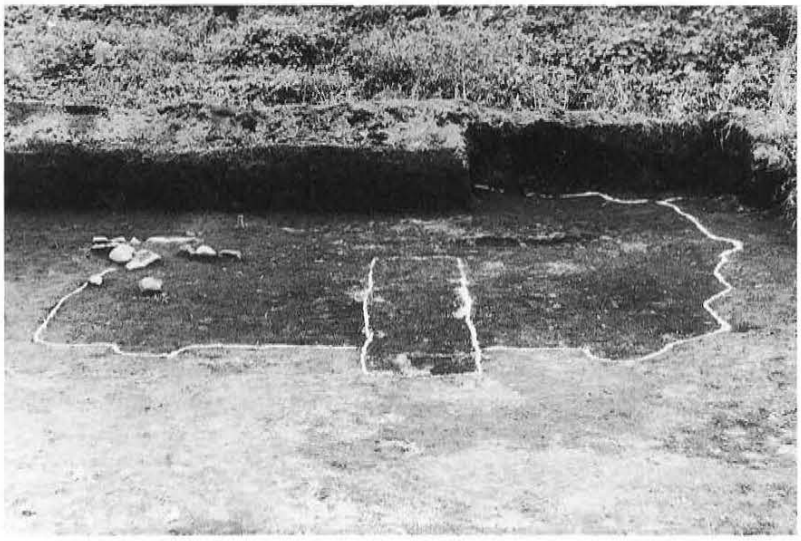
図版 1

表土除去

平面精査

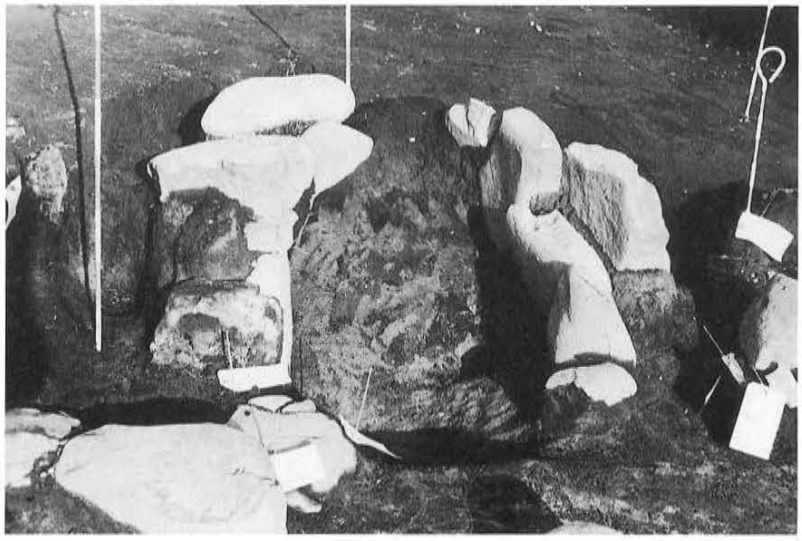
遺跡全景
（西より）

図版 2



1号住居跡精査前
（北より）

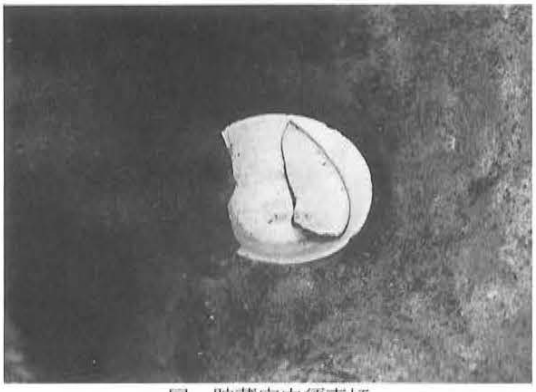
同、遺物検出状況（同）



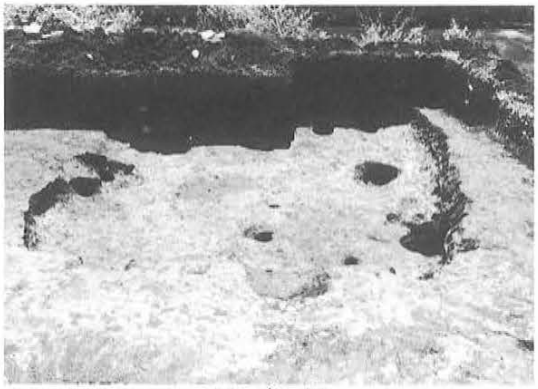
同、カマド（西より）

1号住居跡炭火材

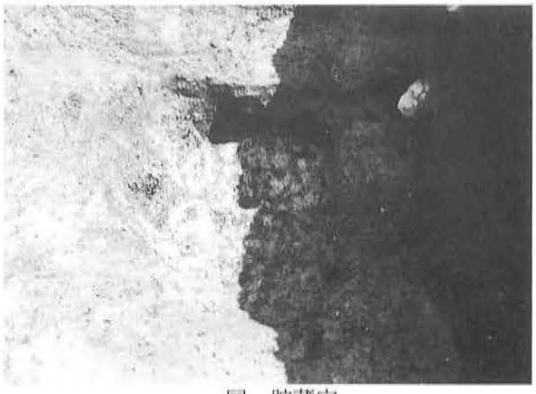
同、須恵埦



同、貯蔵穴内須恵坏

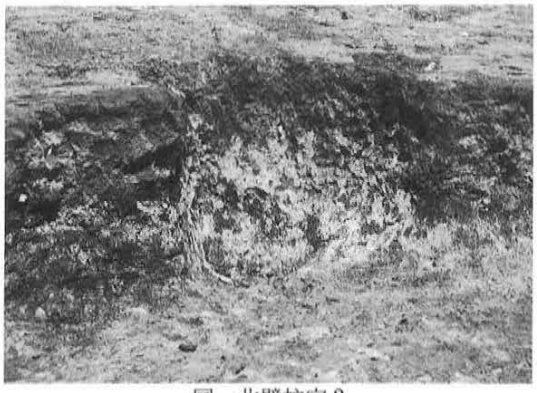


同、完　掘



同、貯蔵穴

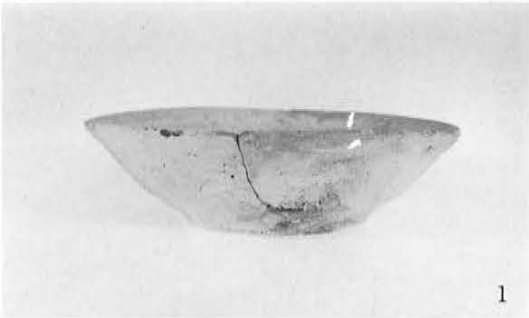
同、P5

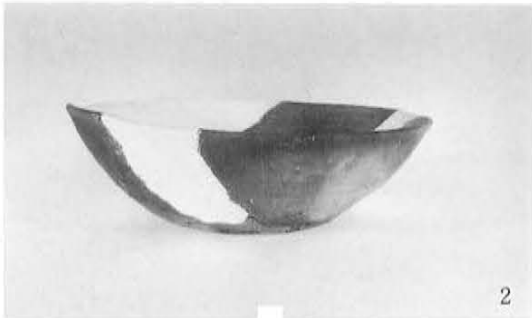


同、北壁柱穴？

同、P4

図 版 4　　1号住居跡出土遺物

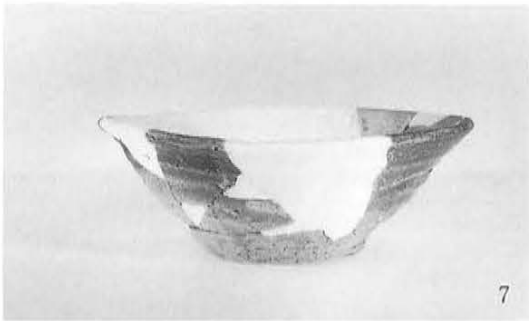

1


2

5

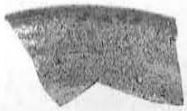
(底部外面)

6


7

9

10


11

12

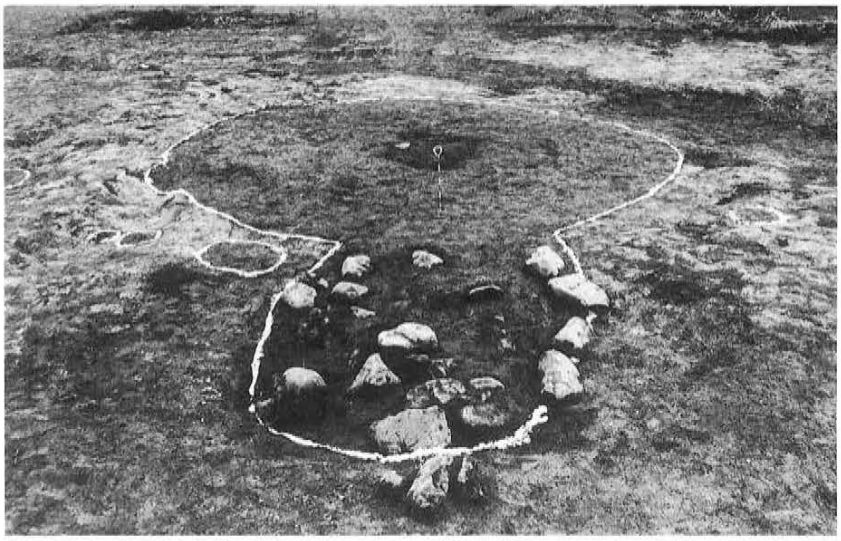
14

15

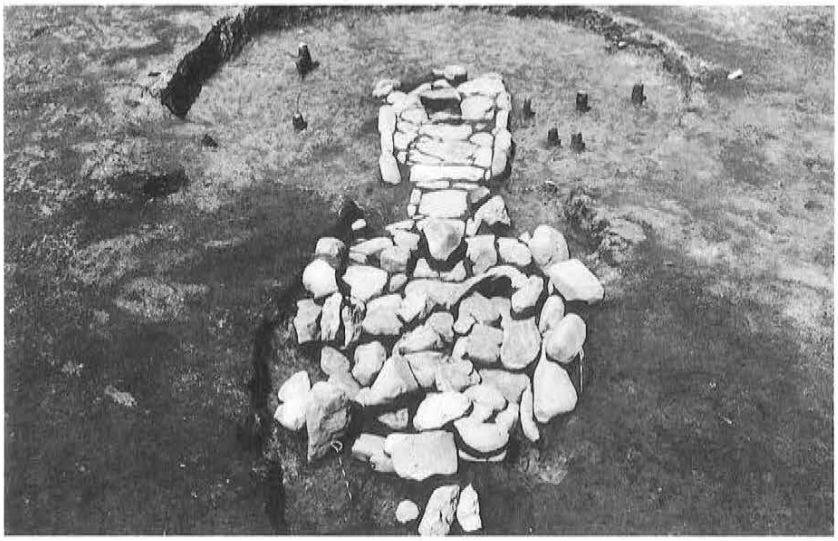
16

8

17



2号住居跡精査前
（南より）



同、遺物、崩石検出状況
（同）

同上（西より）

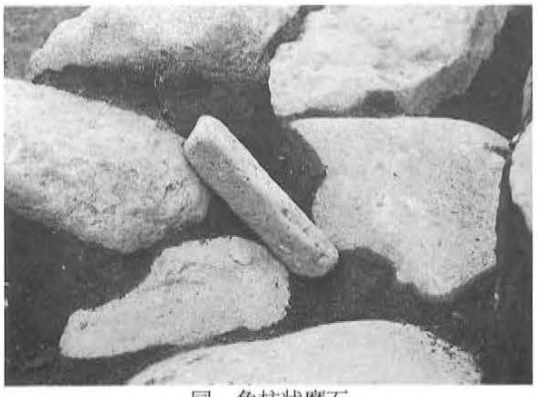
図版 6

2号住居跡、石錘

同、石　斧

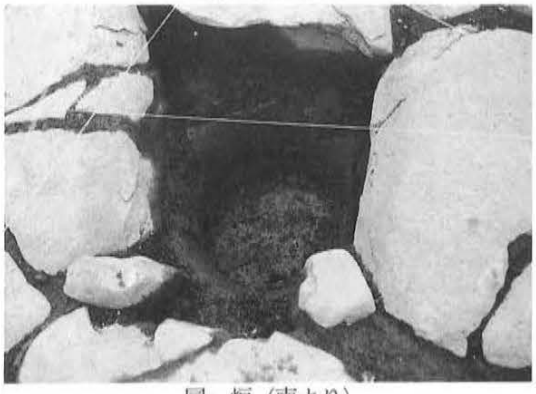
同、チャート

同、多孔石



同、角柱状磨石

同、土器片



同、炉（南より）

2号住居跡敷石全景
（南より）

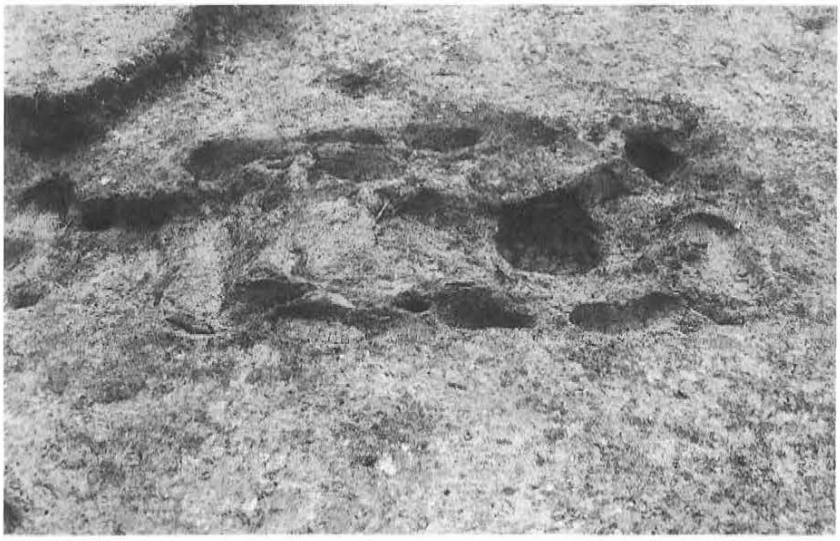
同、主体部敷石

同、張出部敷石

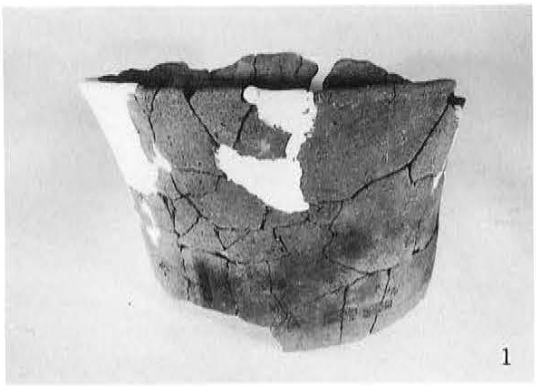
図版 8

2号住居跡
張出部より主体部へ

同、敷石除去全景
（南より）

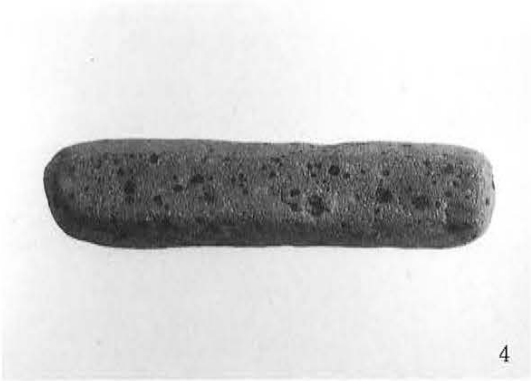


同、敷石除去主体部
（東より）

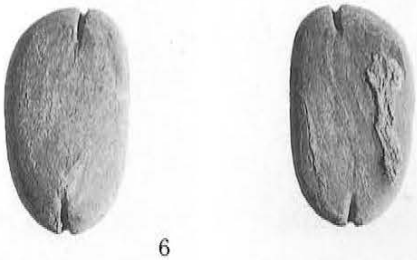

1

2

3


4

5


6

7

8

図版 10

1号土坑（北より）

2号土坑（同）

3号土坑（西より）

4号土坑（同）

5号土坑（北より）

6号土坑（同）

右より7、8、9号土坑（同）

10号土坑（同）

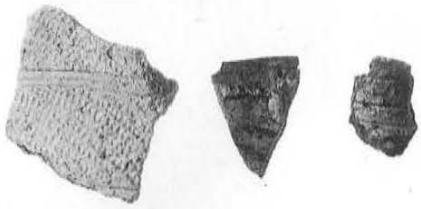
5号土坑出土遺物（須恵甕）

遺構外出土遺物

図版 12

遺構外、縄文深鉢

底部外面



遺構外、縄文土器片

調査参加者

二軒在家二本杉遺跡

平成４年４月30日発行
編集・発行　松井田町埋蔵文化財調査会
（教育委員会内）
〒379-02　群馬県碓氷郡
松井田町新堀1371
ＴＥＬ　0273（93）３３３５
印　　刷　碓氷印刷株式会社